

## ジャイナ教空衣派における

### 「タントラ的な美徳の瞑想」〈1〉

#### — 「物質的な対象に関わる瞑想 (piṇḍasthadhyāna)」

#### — について —

是 松 宏 明

#### 研究の背景

本論はジャイナ教におけるタントリズム<sup>1</sup>の研究の一環として、空衣派のシュバチャンドラ (Śubhacandra; 11世紀頃)<sup>2</sup>の『ジュニャーナールナヴァ (Jñānārṇava)』(以下JA)所説の瞑想 (dhyāna) について論じる。

瞑想について詳しく書かれている初期のジャイナ教文献は少なく、その内の一つにウマースヴァーミン (Umāsvāmin; 2-5世紀頃)<sup>3</sup>の『タットヴァールタ・スートラ (Tattvārthasūtra)』(以下TAS)がある<sup>4</sup>。TASは空衣派と白衣派の両派で教義綱要書として権威づけられており、認識論や宇宙論、業論、修行論などの基本的な教説を全般的に扱っている。TASの空衣派における最古の注釈<sup>5</sup>としてはプージャパーダ (Pūjapāda; 6世紀頃)<sup>6</sup>の *Sarvārthasiddhi* (以下SS)がある。

TASは瞑想を「苦惱・残忍・美徳・純粹 (ārta, raudra, dharmya, śukla)」(後述)の四種類に大別している。シュバチャンドラもこの瞑想の四分類を踏襲している。しかしJAで

1 タントリズムを定義する試みの中で最も重要なものとして、井田克征は [Gupta, S.:1979:7-9] 中の T. Goudriaan によるタントリズムの 18 要素を挙げている [井田:2012:6-9]。以下、T. Goudriaan によるタントリズムの 18 要素の中で JA に当てはまるものを [井田:2012:6-9] から以下のように引用する。

- (1) 身体内のチャクラに沿ってクンダリーネを上昇させるようなヨーガの実践。
- (2) ミクロコスモスとマクロコスモスの対応性という観念と、それに基づいて行われる成就法。
- (3) 言葉に関する神秘主義的な考察。語 (śabda) と意味対象 (artha) との並行的な世界創造という観念。
- (4) マントラ、種子 (bija) の使用。
- (5) 幾何学的図形 (maṇḍala, yantra, cakra, etc.) や、所作 (kriyā) の使用と、その象徴論的な解釈。
- (6) 特別な方法で行われる念想 (dhyāna)。内的なイメージにおいて、超自然的世界を実現する。
- (7) 数と言葉のシンボリズム。
- (8) (1) で述べたようなヨーガと、シッダ (siddha) の錬金術やハタヨーガなどとの結びつき。

2 Bālacandra Śāstrī 編の JA の pp.17-20 を参照。

3 ウマースヴァーミンは空衣派と白衣派の完全な分裂が生じる前の人物である可能性が指摘されている [Wiley:2014:241]。

4 白衣派ではウマースヴァーティ (umāsvāti) と呼ばれ、著作も『タットヴァールターディガマ・スートラ (Tattvārthadhigamasūtra)』と別名で呼称される。

5 白衣派の最古の注釈としてはウマースヴァーティの自註があるが、空衣派は偽作としている。

6 プージャパーダの出家名は Devanandin であるが、SS の著者としてはプージャパーダの名前で呼称される方が一般的である。Phūlacandra Śāstrī 編の SS の pp.78-79 を参照。

は TAS には見られないタントリズムの影響を受けた新しい瞑想方法が説かれる<sup>7</sup>。

ジャイナ教や初期仏教に代表される沙門の宗教は身体や輪廻世界を不浄なものとして考える傾向がある。それに対してタントラ思想は修行による現象世界の聖化を説く。その後の展開で、タントラ思想は仏教の修行体系に大きな影響を与えた。しかしジャイナ教は当時流行していたタントラ思想にどのような態度を取っていたのかまだ未解明の点が多い<sup>8</sup>。JA の瞑想方法の研究はこの問題を明らかにする上で重要である。本論では TAS におけるジャイナ教の基本的な瞑想論について概説した後に JA の瞑想法の特徴について論じる<sup>9</sup>。

## 1. TAS における瞑想

瞑想はヨーガ学派では八支足 (aṣṭāṅga) の七番目に当たるが<sup>10</sup>、ジャイナ教では苦行 (tapas) の一種として定義されている。ジャイナ教における苦行とは新しく付着する業の遮断 (saṃvara) と既に付着している業の消滅 (nirjarā) をもたらす行為である<sup>11</sup>。そして、ジャイナ教では苦行を外的な苦行 (bāhyatapas) と内的な苦行 (ābhyantaratapas) の2種類に分けており<sup>12</sup>、瞑想は内的な苦行に含まれる。

TAS では瞑想を「一点に思惟を制御すること (ekāgracintānirodha)」と定義している<sup>13</sup>。瞑想は前述したように苦悩・残忍・美德・純粹の四種類に大別される<sup>14</sup>。これら前半の2

7 本邦においては松濤誠廉が JA の「タントラ的な美德の瞑想」(後述)の内容を紹介している。しかし松濤はこの時点でサンスクリット原文の刊本を入手していなかったため、限定的な説明に留まっている[松濤:1967:245-250]。また河崎豊がジャイナ教文献における「情欲に苛まれた者が経験する10種類の衝撃」という概念の研究の中で JA の記述を取り上げている[河崎:2014:73-74]。

8 ジャイナ教に対するシヴァ派のタントリズムからの影響に関しては[Sanderson:2009:243-249]を参照。

9 本発表で使用する JA のテキストは Jivarāja Jaina Granthamālā の30号に該当する Bālacandra Siddhānta Śāstrī の校訂本である。Siddhānta Śāstrī が JA を校訂する際に使用された資料は17種類の写本と紀元後1907年にヒンディー語訳付きで印刷された書籍版(詳細不明)である。最古の写本はヴィクラマ暦1284年、最も新しいものはヴィクラマ暦1485年のものである。ヴィクラマ暦は56あるいは57年引くことで西暦となる。Bālacandra Śāstrī 編の JA の pp.7-15 を参照。

10 deśabandhaś cittasya dhāraṇā. tatra pratyaikātānatā dhyānam. tad evārthamātranirbhāsam svarūpaśūnyam iva samādhiḥ. // *Yogasūtra* 3.1-3

「心を場所に固定することが凝念 (dhāraṇā) である。そこに対して一点集中することが瞑想である。他にもないその対象の本性が虚空のように現れることが三昧である」

11 tapasā nirjarā ca//TAS 9.3

苦行によって、[業の遮断と]消滅あり

12 anaśanāvamaudaryavṛttiparisamkhyānarasapṛityāgaviviktaśayyāsanakāyākleśā bāhyam tapaḥ. //TAS 9.19

prāyaścittavinayavaiyāvṛtṭiyasvādhyāyavyutsargadhyanāny uttaram. //TAS 9.20

断食と減食、食物に対する一定の制限、美味の捨離、閑居孤坐、身体の難行が外的な苦行である。贖罪と端然、奉仕、勉学、放慮、瞑想が後者(内的な苦行)である。

TAS 9.18～19のそれぞれの苦行の和訳は prāyaścitta と dhyāna 以外は[金倉:193]の訳語を用いた。

13 uttamasaṃghananasyaikāgracintānirodho dhyānam āntarmuhūrtāt. //TAS 9.27

ムフルタ(48分)間まで、最上の関節の堅固[の者]が一点に思惟を制御する事が瞑想である。

瞑想の時間がムフルタ間までの理由は SS 872によると、それ以上の時間、一点への思惟を保持することが困難であるためである (tataḥ paraṃ durdharatvād ekāgracintāyāḥ) であるという。saṃghanana とは nāmakarman (生き物の個性を決定する業) の一種で、骨格や関節の堅固さを6段階で決める。

yasyodayāḥ asthibandhanaviśeṣo bhavati tat saṃghananāma. // SS 755 より抜粋

それが生じることによって骨の連結の差異となるのが saṃghanana という nāma [karman] である。

14 ārtaraudradharmyaśuklāni //TAS 9.28

苦悩・残忍・美德・純粹[の瞑想]がある。

種類の瞑想は輪廻の原因となる賞賛されない瞑想とされている<sup>15</sup>。そして後半の美德の瞑想<sup>16</sup>と純粹の瞑想は解脱の原因<sup>17</sup>となる賞賛される瞑想とされる。

美德の瞑想はジャイナ教の教義に関する内容を対象とする瞑想であり、純粹の瞑想は身口意の活動を停止させて、解脱に至る瞑想である<sup>18</sup>。

美德の瞑想はジナの教説を考察の対象とする「教令の考察 (ājñā-vicaya)」、正法から生類が逃避してしまうことについて考察する「惨禍の考察 (apāya-vicaya)」、業の異熟を考察の対象とする「異熟の考察 (vipāka-vicaya)」、世界の構造について考察する「構造の考察 (saṃsthāna-vicaya)」の4種類に細分化される<sup>19</sup>。

## 2. JA の構成と「タントラ的な美德の瞑想」

JA は 2230 頌の著作で、39 章に分けられる。前半はジャイナ教の基本的な教義に関する章が多く、瞑想に関する章は後半に集中している。JA の章構成は以下のようになっている<sup>20</sup>。TAS の瞑想の分類と共通する箇所には波線を引いている。

- ch.1 導入部 (pīṭhikā) 49 頌
- ch.2 十二の修習 (dvādaśabhāvanā) 197 頌
- ch.3 瞑想の特徴 (dhyānalakṣaṇa) 37 頌
- ch.4 瞑想の利点と過失 (dhyānaguṇadoṣa) 70 頌
- ch.5 ヨーガの礼賛 (yogaprasāṃsā) 29 頌
- ch.6 信仰の浄化 (darśanaviśuddhi) 66 頌
- ch.7 知識の応用 (jñānaprayoga) 23 頌
- ch.8 不殺生戒 (ahiṃsāvratā) 59 頌

15 pare mokṣahetū' iti vacanāt pūrve ārtarandre saṃsārahētū ity uktaṃ bhavati. // SS 876 より抜粋

「後者 [の dharmya-dhyāna と śukla-dhyāna] は解脱の原因である」という言葉の前に、苦悩の [瞑想] と残忍の [瞑想] は輪廻の原因である、と言われる。

16 dharmya-dhyāna の dharmya とは、SS によると以下の意味であり、美德から逸脱していない瞑想を指す。

uttamaṣamādīlakṣaṇo dharmā uktaḥ. tasmād anapetaṃ dharmyaṃ dhyānaṃ caturvikalpam avaseyam. // SS 890 より抜粋

最上の寛容などを特徴とした美德 (dharma) が説かれた。それから逸脱していない美德の瞑想の4種類が学ばれるべきである。

uttamaṣamā は TAS 9.6 でも説かれるジャイナ教の10種類の美德 (daśalakṣaṇadharmā) の一つである。

uttamaṣamāmārdavārjāvaśaucasatyasaṃyamatapastyāgākīncanyabrahmacaryāni dharmāḥ // TAS 9.6

美德とは最上の忍耐と謙和、正直、廉潔、真実、禁戒、苦行、喜捨、欠乏、梵行である (それぞれの美德の和訳は [金倉: 189] を参照)。

17 pare mokṣahetū // TAS 9.29

後者 [の dharmya-dhyāna と śukla-dhyāna] は解脱の原因である。

18 SS 891-906 を参照。

19 ājñāpāyavīpākasamsthānavicayā dharmyam. // TAS 9.36

教令 (ājñā) [の考察]、惨禍 (apāya) [の考察]、[業の] 異熟 (vipāka) [の考察]、[世界の] 構造 (saṃsthāna) の考察に対して [憶念を継続する事 (smṛtisamanvāhāra) が] 法の [瞑想] である。

20 章の偈頌の総数は 35.6.1 や 36.43.1 などの補いの偈頌も含めている。

- ch.9 眞実戒 (satyavrata) 42 頌  
 ch.10 偷盗の忌避 (cauryaparihāra) 20 頌  
 ch.11 愛欲という激情 (kāmaprakopa) 48 頌  
 ch.12 女性の本性 (strīsvarūpa) 59 頌  
 ch.13 性交 (maithuna) 26 頌  
 ch.14 執着 (saṃsarga) 45 頌  
 ch.15 老年者への世話 (vṛddhasevā) 48 頌  
 ch.16 所有という過失についての思索 (parigrahadoṣavicāra) 45 頌  
 ch.17 願望という女屍鬼 (āśāpiśācī) 21 頌  
 ch.18 感覚器官の対象の制御 (akṣaviṣayanīrodha) 166 頌  
 ch.19 [個我の] 三要素 (tritattva) 20 頌  
 ch.20 思考器官の機能の解説 (manovyāpārapratipādana) 36 頌  
 ch.21 愛欲などへの阻止 (rāgādinivāraṇa) 40 頌  
 ch.22 平等心の力 (sāmyavaibhava) 33 頌  
 ch.23 苦悩の瞑想 (ārtadhyāna) 43 頌  
 ch.24 苦悩と残忍 [の瞑想] (ārtaraudra) 44 頌  
 ch.25 瞑想に反する状態 (dhyānaviruddhasthāna) 35 頌  
 ch.26 調息法 (prāṇāyāma) 154 頌  
 ch.27 制感 (pratyāhāra) 14 頌  
 ch.28 勇気を備えた瞑想 (savīrya dhyāna) 43 頌  
 ch.29 清浄なる実践についての思索 (śuddhopayogavicāra) 104 頌  
 ch.30 教令の考察 (ājñāvicaya) 23 頌  
 ch.31 惨禍の考察 (apāyavicaya) 18 頌  
 ch.32 異熟の考察 (vipākavicaya) 31 頌  
 ch.33 構造の考察 (saṃsthānavicaya) 188 頌  
 ch.34 物質的な対象に関わる瞑想 (piṇḍasthadhyāna) 33 頌  
 ch.35 言葉に関わる瞑想 (padasthadhyāna) 123 頌  
 ch.36 形象に関わる瞑想 (rūpasthadhyāna) 47 頌  
 ch.37 形象を超えたもの [の瞑想] (rūpātīta) 32 頌  
 ch.38 美徳の瞑想の結果 (dharmadhyānaphala) 28 頌  
 ch.39 純粹の瞑想の結果 (śukladhyānaphala) 91 頌
- } TAS の「聖典に説かれた美徳の瞑想」
- } 「タントラ的な美徳の瞑想」

以上のように、JA は TAS の瞑想の四区分を踏襲している。しかし、JA では 34 章から 37 章にかけて、TAS にはなかった 4 種類の瞑想方法が別の種類の美徳の瞑想として説か

れている。それは四大の観想によって身体を浄化する「物質的な対象に関わる瞑想 (piṇḍasthadhyāna)」(JA34 章) と様々なマントラの文字の布置 (nyāsa) や念誦の行法を含む「言葉に関わる瞑想 (padasthadhyāna)」(JA35 章)、一切智者の特性を観想する「形象に関わる瞑想 (rūpasthadhyāna)」(JA36 章)、形象を持たない個我を観想する「形象を超えたものの瞑想 (rūpātītdhyāna)」(JA37 章) である。これらの瞑想は TAS の美徳の瞑想とは性質が大きく異なる。TAS の美徳の瞑想はジナの教令や業の異熟などの教理を対象とする考察となっているが、JA の美徳の瞑想は四大の観想やマントラの念誦などを通して望んだ結果を得ようとするタントラ的な象徴万能主義を特徴とする。

ジャイナ教研究者 Qvarnström は TAS 所説の美徳の瞑想を canonical virtuous meditation (「聖典に説かれた美徳の瞑想」) として、また JA 所説の美徳の瞑想を tantric virtuous meditation (「タントラ的な美徳の瞑想」) と呼んでいる<sup>21</sup>。本論では前述した四種類の「タントラ的な美徳の瞑想」の中から、特にタントラ的な要素が濃厚な「物質的な対象に関わる瞑想」について中心的に論じる。

### 3. 「物質的な対象に関わる瞑想」(JA ch.34)

「物質的な対象に関わる瞑想」を主題とする JA34 章では瞑想の下位区分として 5 種類の凝念 (dhāraṇā) が登場する。「物質的な対象に関わる瞑想」は地の凝念→火の凝念→風の凝念→水の凝念→形象を伴った原理 (tattvarūpavati)<sup>22</sup> の凝念という構成になっている<sup>23</sup>。

piṇḍasthe pañca vijñeyā dhāraṇā vīravarnitāḥ /

saṃyamī yās asaṃmūḍho janmapāśān nīkr̥ntati // JA 34.2

pārthivī syat tathāgneyī śvasanākhyātha vāruṇī /

tattvarūpavati ceti vijñeyāstā yathākramam // JA 34.3

物質的な対象に関わる [瞑想] では、観想されるべき 5 種類の凝念 (dhāraṇā) が英雄 (vīra) によって説かれた。この凝念において、愚かさを完全に滅した自制を保つ者は生

21 「タントラ的な美徳の瞑想」が登場する最古の文献は空衣派のヨーギーンドゥ (Yogīndu, 6-10 世紀頃、別名 Joindu, Yogendra) の著作 *Yogasāra* からである。参考として、Colette Caillat の訳から和訳する [Caillat:1998:246]。

jo piṇḍatthu payattu buha rūvatthu vi jīna-uttu /

rūvāṭu muṇehi lahu jīma paru hohi pavittu // *Yogasāra* 98

思惟せよ、おお賢者よ。四種類の精神的な瞑想 (4 種類のタントラ的な美徳の瞑想の名前に対する翻訳者の意識) がジナによって説かれた。滞りなく、汝が欠点のない者となるように。

ヨーギーンドゥは明確な生没年が判明しておらず、プージャパーダより後で、ヘーマチャンドラ (Hemacandra, 1089-1172 年) より前の人物であると考えられている [Wiley:2014:241]。

22 tattvarūpavati の凝念は 34 章内で具体的に明示されておらず、何を対象とした凝念なのかは明確に書かれていないが、おそらく水の凝念が終わった後の清められた自己を観想することを指していると考えられる。

23 四大の観想によって身体を浄化するという発想はヒンドゥータントラにも見られるものであり、「元素の浄化 (bhūtaśuddhi)」と呼ばれる [井田 2012:237]。

という絹索を断ち切る。地そして火、風、水、形象を伴った原理 (tattvarūpavatī) と名付けられたものがこの順に知られるべきである。

### 3-1. 地の凝念 (ch.34.4-9)

地の凝念では瞑想者が瞑想の中で自身の存在している大地を観想する。乳海に浮かぶジャンブー大陸 (jambūdvīpa) と同じ大きさの千弁の蓮華の上に、白い獅子座に座っている自己を観想する。

abjarāgasamudbhūtakesarālvirājitam /

jambūdvīpaprāmāṇam ca cittabhramarañjakam // JA 34.6

svaṇṇācalamayīm divyām tatra smarati karṇikām /

sphuratpiṅgaprabhājālapiśaṅgitadigantarām // JA 34.7

śaraccandranibhaṃ tasyām unnataṃ hariviṣṭaram /

tatrātmānaṃ sukhāsīnaṃ praśāntam iti cintayet // JA34.8

ジャンブー大陸と同じ大きさであり、赤みを帯びており (rāgasamudbhūta)、花糸の列で飾られている (kesarālvirājita)<sup>24</sup>、心という蜂 [cittabhramara] を [花粉で] 色付ける蓮華を [観想すべし]。そこに黄金の山のできていて、輝きつつある黄色の光線の網で十方を赤みがかった黄色にする神々しい花托を観想すべし。その [花托の] 上には秋の月のような獅子座を、そこに安楽に座して泰然たる個我を、と観想すべし。

### 3-2. 火の凝念 (ch.34.10-19)

火の凝念では身体内の蓮華という概念が登場する。これは仏教タントラやヒンドゥータントラではしばしば cakra と呼ばれるものに該当する。まずは臍の蓮華の花弁に 16 文字の母音字列を観想し、その中央に偉大なマントラと呼ばれる rham 字を置く。rham 字の r 字から煙が生じ、そして火となり、八種類の業<sup>25</sup>を生じる心臓にある下向きの八葉蓮華を燃焼し、身体を燃やし尽くして灰になる、と観想する。

tato'sau nīscalābhyāsāt kamalaṃ nābhimaṇḍale /

smaraty atimanohāri ṣoḍaśonnatapatrakam // JA 34.10

pratipatrasamāsīnasvaramālāvirājitam /

24 注釈では parāgaśreṇīśobhita と言い換えられている。注釈に従えば「花粉が散って輝く」で、Bālacandra のヒンディー語訳も注釈に従っている。本論の和訳ではより原文に忠実な意味で取った。

25 ジャイナ教において業は、mohaṇīya (迷妄の障害)、jñānāvaraṇīya (知識の障害)、darśanāvaraṇīya (信仰の障害)、antarāya (内部に障害をもたらすもの)、vedanīya (感受の障害)、nāma (名称に関する障害)、āyu (寿命に関する障害)、gotra (類の区別を作る障害) の 8 種類に大別される [渡辺研二:2006:142-144]。

karṇikāyām mahāmantram visphurantaṃ vicintayet // JA 34.11

repharuddham kalābindulāñchitaṃ śūnyam akṣaram /

lasad binducchaṭākoṭīkāntivyāptaharinmukham. // JA 34.12 ‘rham

tasya rephād viniryāntīm śanair dhūmaśikhām smaret /

sphuliṅgasamtatiṃ paścāj jvālālīm tadanantaram // JA 34.13

tena jvālākālāpena vardhamānena samtatam /

dahatyavirataṃ dhīraḥ puṇḍaroṃkaṃ<sup>26</sup> hr̥di sthitaṃ // JA 34.14

tadaṣṭakarmanirmāṇam aṣṭapatram adhomukham /

tadatyeva mahāmantradhyānotthapracalānalaḥ // JA 34.15

そしてこうした不動の修練によって、臍輪に十六弁の上向き（unnata）大変美しい蓮華を観想する。[臍の蓮華の] 全ての各花卉には輝く [十六字（a, ā, i, ī, u, ū, r, ṛ, l, ḷ, e, ai, o, au, am, aḥ）の] 母音字の列で飾られている。花托には偉大なマントラ（mahāmantra）[である rham] が振動している [様子を] 観想すべし。[偉大なマントラは] r 字が載った、[チャンドラビンドゥの] 三日月と雫（kalābindu）で飾られた空の字（śūnya akṣara）[である ha 字] である。輝きつつある（lasat）頂きの滴 [から] 黄色の光線群が四方に広がっている。[以上が偉大なマントラである] rham 字である。その [偉大なマントラの] r 字から徐々に生じつつある立ち上る煙を観想し、その後で火花の列を [観想し]、その直後に途切れることのない炎の列 [を観想すべし]。段々と大きく燃え広がっていくかの炎の輪によって心臓に位置する蓮華がゆっくりと止まる事なく燃えていく。その 8 種の業を作り出す、下方を向いた 8 弁 [の心臓の蓮華] を、偉大なマントラの瞑想 [によって] 生じた、大変激しい炎が燃やしている。

JA では「聖典に説かれた美徳の瞑想」では瞑想の対象とされていなかった身体内部の要素を観想の対象に含めている。「物質的な対象に関わる瞑想」では業が生じる場所として、心臓にある下向きの八葉蓮華を瞑想する。八種類の業が心臓の蓮華から生じるという描写から、シュバチャンドラはマントラの炎で身体を燃やし尽くす観想法の中で業を心臓の位置に仮想的に割り当てることで業と身体を疑似的に結びつけるという TAS にはない発想を持っていたことが分かる。

### 3-3. 風の凝念 (ch.34.20-23)

風の凝念では火の凝念によって灰と化した自身の身体の塵埃が力強い風によって吹き飛ばされる様子を観想する。

26 注釈では puṇḍarīka。写本校訂の際の誤植だと思われる。

uddhūya tadrajaḥ śīgraṃ tena prabalavāyunā /

tataḥ sthīrīkṛtābhyāsaḥ samīraṃ śāntim ānayet // JA 34.23 mārutī.

即座にその〔燃え尽きた身体と蓮華から出来た灰の〕塵埃をそうした力強い風によって立ち上らせてから、そこで堅固に為された修練が風を静めるだろう。〔以上が〕風の〔凝念である〕。

### 3-4. 水の凝念 (ch.34.24-27)

水の凝念では、甘露の雨を降らす雲を観想し、風の凝念の後に残った塵埃を洗い流す様子を観想する。

vāruṇyā sa hi puṇyātmā dhanavrātacitaṃ nabhaḥ /

indrāyudhataḍid garjita<sup>27</sup> camatkārākulaṃ smaret // JA 34.24

sudhāmbuprabhavaiḥ sāndrair bindubhir mauktikojjvalaiḥ /

varśantaṃ taṃ smared dhīraḥ sthūlasthūlair nirantaraiḥ // JA 34.25

〔続いて〕水の〔凝念である〕。まさに福德に満ちた性質を持った彼（ヨーガ行者）はインドラの武器である雷光が鳴動しつとあり驚愕に満ちているたくさんの雲に包まれた空を観想すべし。賢者は甘露水でできた、真珠のように輝く、止むことのなく降り注いでいる大粒の濃密な雨粒を観想すべし。

### 3-5. 形象を伴った原理の凝念と「物質的な対象に関わる瞑想」のまとめ (ch.34. 28-33)

水の凝念が終わった後、これまでの凝念によって純化された修行者は、自己を人の形 (puruṣākāra) をした純粋な個我として観想する。

saptadhātuvinirmuktaṃ pūrṇacandrāmalatviṣam /

sarvajñakalpam ātmānaṃ tataḥ smarati śuddhadhīḥ // JA 34.28

続いて清浄な知性を持つ者は7種の〔身体の〕構成要素 (saptadhātu)<sup>28</sup> から解き放たれており、満月のように清らかに輝く一切智者の如き個我を観想する。

vilīnāśeṣakarmāṇaṃ sphurantamatinirmalam /

svaṃ tataḥ puruṣākāraṃ svāṅgarbhagataṃ smaret // JA 34.30

このように業を完全に滅して、清らかに輝きつとあり、人の形をしている四肢

27 異読では次の単語の camatkārākulaṃ と連声で繋がって、garjac camatkārākulaṃ となっている。この読みでないと文法的に意味が成立しない。

28 saptadhātu とは身体を構成する乳糜 (rasa)、血液 (rakta)、筋肉 (māṃsa)、脂肪 (medas)、骨 (asthi)、骨髓 (majjā)、精液 (śukla) を指す。



(svāṅga) の中にある自己を観想すべし。

「物質的な対象に関わる瞑想」を為した者は個我の純粹性を獲得する。それだけではなく、シュバチャンドラはこの瞑想法によって、呪術や猛獣、魑魅魍魎などからの悪影響からも免れることが可能であるというある種の現世利益的な効能も述べている。

vidyāmaṇḍalamantrayantrakuhakakrūrābhicārakriyāḥ siṃhāśīviṣadaityadantiśarabhā yānty eva  
niḥsāratām /

śākinyo graharākṣasaprabhṛtayo muñcanty asadvāsanām etad dhyānadhanasya saṃnidhivaśād  
bhānor yathā kauśikāḥ<sup>29</sup> // JA 34.33

呪句やマンダラ、マントラ、ヤントラ、詐術 (kuhaka)、残忍な調伏 (krūrābhicāra) と  
いった修法や獅子、毒蛇、ダイティヤ、象、シャラバ達は実に無益を為す。シャーキニー  
達や惑星 (graha)<sup>30</sup>、羅刹などといった悪影響 (asadvāsanā) から解放する。これが瞑想の  
宝に近付くことである。梟達が力によって太陽に [近付く] ように。

#### 4. 結 論

ジャイナ教の教義綱要書 TAS では瞑想は内的な苦行の一種とされており、「一点に思惟  
を制御すること」と定義されている。ジャイナ教では瞑想は苦悩・残忍・美徳・純粹の四  
種類に大別される。これら前半の2種類の瞑想は輪廻の原因とされており、そして後半の  
美徳の瞑想と純粹の瞑想は解脱の原因となる瞑想とされる。

美徳の瞑想は教令の考察、惨禍の考察、異熟の考察、構造の考察の四種類に分類され  
る。そして純粹の瞑想は身口意の活動を停止させて、解脱に至る瞑想である。

JA でも TAS の瞑想の四区分を踏襲されている。しかしシュバチャンドラは TAS にはな  
い「物質的な対象に関わる瞑想」と「言葉に関わる瞑想」、「形象に関わる瞑想」、「形象  
を超えたものの瞑想」と呼ばれる四種類の瞑想方法を別の種類の美徳の瞑想として説く。  
先行研究者は TAS 所説の美徳の瞑想を「聖典に説かれた美徳の瞑想」、JA 所説の美徳の  
瞑想を「タントラ的な美徳の瞑想」と呼称している。

「タントラ的な美徳の瞑想」は TAS の「聖典に説かれた美徳の瞑想」と性質が異なり、  
「聖典に説かれた美徳の瞑想」が教学的な内容であるのに対して、「タントラ的な美徳の瞑  
想」では四大の観想やマントラなどの象徴的な対象を通して、望んだ結果を得ようとする

29 この箇所は異読がなく、構文に問題がある。saṃnidhir vaśād でなければ正確に訳せない。

30 註釈では「graha とは計斗星等 (grahāḥ ketvādayaḥ)」と説明されている。graha は√grah「掴む」から派生した名詞で、人に占星術的な影響を与える九曜の惑星(太陽、月曜、火曜、水曜、木曜、金曜、羅喉、計斗)や取り憑いて害を為す憑物を意味する。[立川:2004:118]によると古代インドでは人に憑依して、病などの不幸を移すと考えられた魔的なもののグループを graha と呼んだという。そこから占星術的な文脈で吉凶をもたらすとされた九曜と同一視あるいは結び付けて考えられたという。

象徴万能主義を特徴とする。

JA34章「物質的な対象に関わる瞑想」では瞑想の下位区分として地、火、風、水、形象を伴った原理という5種類の凝念が説かれる。火の凝念では身体内部の蓮華という生理学的な要素も観想の対象となる。「物質的な対象に関わる瞑想」は地の凝念で自身のいる大地を観想し、火の凝念では業が生じる場所として心臓の八葉蓮華を観想し、マントラから生じた炎で燃えて灰となるように観想する。そして風と水の凝念によって灰となった自分の身体の灰を払い、形象を伴った原理の凝念で自身を純粋な個我として観想する、という過程になっている。シュバチャンドラはこれらの凝念を経た瞑想者は個我の純粋性を獲得し、更に呪術や猛獣などからの悪影響を免れるという現世利益的な効能も得られると説く。

## 参考文献

### 一次資料

*Haṭhayogapradīpikā* of Svātmārāma

edited by J. L. Gupta and translated by Pancham Sinh, 2003, The Vrajajiv Indological Studies 29, Chaukhamba Sanskrit Pratishthan: Jawahar Nagar.

*Jñānārṇava* of Śubhacandra

edited and translated by Bālacandra Siddhānta Śāstrī, 1977, Jivarāja Jaina Granthamālā, Hindī Vibhāga 30, Jaina Saṃskṛti Saṃrakṣaka Sangha: Solāpūra.

*Sarvārthasiddhi* of Pūjyapāda

edited and translated by Phūlacandra Śāstrī, Fourth Edition 1989, Bhārāṭiya Jñānapīṭha: Nāī Dillī.

*Sthānāṅgasūtra* (pkt. *Ṭhānāṅgasutta*)

edited by Muni Jambūvijaya, 2003, Śrī Siddhi Bhuvana Manohara Jaina Trust: Amadāvāda and Śrī Jaina Ātmānanda Sabhā: Bhāvanagara

*Tattvārthāsūtra* of Umāsvāmin

*Sarvārthasiddhi* of Pūjyapāda edited and translated by Phūlacandra Śāstrī, Fourth Edition 1989, Bhārāṭiya Jñānapīṭha: Nāī Dillī. に含まれている。

*Yogasāra* of Yogīndu

edited by Nalini Balbir, “Glossaire du Paramātmaprakāśa et du Yogasāra” in *Bulletin D’études Indiennes* 16, 1998, Association Française Pour Les Etudes Indiennes: Paris. pp.249-318.

*Yogasūtra* of Patañjali

edited and translated by Rāma Prasāda, the Sacred Books of the Hindus vol. 4, first AMS edition 1974, AMS Press: New York.

### 二次資料

Bākalīvāla, Pannālāla

[1998] *Rāyacandra Jaina Śāstramālā Śrīśubhacandrācāryaviracitaḥ Jñānārṇavaḥ*, Prathama Saṃskaraṇa 1906, Paramāśruta Prabhāvaka Maṇḍala: Bambaī.

Bronkhorst, Johannes

[1993a] “Remarks on the History of Jaina Meditation”. in *Jain Studies in Honour of Jozef Deleu*. ed. Rudy Smet & Watanabe Kenji. Hon-no-tomosha: Tokyo. pp. 151-162.

[2016b] “Discontinuity and Innovation in the History of Jaina Meditation” in *Asian Traditions of*

*Meditation*, ed. Halvor Eifring. University of Hawai'i Press: Honolulu. pp. 93-102.

Caillat, Colette

[1998] "Le Yogasāra de Yogīndu" in *Bulletin D'études Indiennes* 16, ed. Balbir Nalini. Association Française Pour Les Etudes Indiennes: Paris. pp. 233-247.

Grimes, John

[1996] *A Concise Dictionary of Indian Philosophy: Sanskrit Terms Defined in English*, State University of New York Press: Albany.

Gupta, Sanjukta and Hones, Dirk Jan, and Goudriaan, Teun.

[1979] *Hindutāntrism*, Handbuch der Orientalistik, Leiden E. J.: Köln.

Mohanlal, Bhagwandas Jhavery

[1944] *Comparative and Critical Study of Mantrasastra (with Special Treatment of Jain Mantravada)*, Sarabhai Manilal Nawab: Ahmedabad.

Nāthūrāma, Premī

[1953] *Jaina Sāhitya aurā Itihāsa*, Pahalī Bāra 1942, Hindī Grantha Ratnākara (Private Limited): Bambaī. Qvarnström, Olle

[2012] *A Handbook on the Three Jewels of Jainism: the Yogaśāstra of Hemacandra*, Hindī Grantha Kāryālaya Pabliśara: Mumbaī.

Sanderson Alexis

[2009] "The Śaiva Age -The Rise and Dominance of Śaivism-" *Genesis and Development of Tantrism*. edited by Einoo Shingo. Tokyo: Institute of Oriental Culture, University of Tokyo. pp. 41-349.

Sogani, Kamala Chand

[2016] "Ethics and Mysticism in Jaina Yoga Spirituality" in *Yoga in Jainism*, ed. Christopher Key Chapple, Routledge: London.

Uditaprabhā, Sādhvī Uṣā

[2007] *Jaina Dharma meṃ Dhyāna kā Aitihāsika Vikāsa Krama*, Navabhāra Prakāśana: Jodhapura.

Wiley, Kristi L.

[2014] *The A-to-Z of Jainism*, First Edition 2006, Scarecrow Press, Inc: U.S.A) , Vision Books Pvt. Ltd: New Delhi.

Williams, R.

[1983] *Jaina Yoga: A Survey of the Mediaeval Śrāvakācāras*, First Edition 1963, London oriental Series vol.14: Oxford) , Motilal Banarsidass: Delhi.

浅野玄誠

[2005] 『ヨーガに関する二十の偈頌 (Yogavimśikā)』 (『仏教とジャイナ教: 長崎法潤博士古稀記念論集』 平楽寺書店. pp. 53-72).

アジット・ムケルジー (松永有慶訳)

[1981] 『タントラ 東洋の思想』 新潮選書.

井田克征

[2012] 『ヒンドゥータントリズムにおける儀礼と解釈 シュリーヴィディヤー派の日常供養』 昭和堂.

宇野智行

[2011] 「ジャイナアーガマ覚え書～聖典と知の関連～」 (『筑紫女学園大学・短期大学部人間文化研究所年報 22号. pp. 1-15』 筑紫女学園大学・短期大学部人間文化研究所)

ヴィンテルニッツ (中野義照訳)

[1976] 『ジャイナ教文献』 日本印度学会.

上村勝彦

[1981] 『インド神話』 東京書籍.

[2002] 『原典訳マハーバーラタ 2巻』 筑摩書房.

河崎豊

[2009] 「anuprekṣā における生死—*Bhagavati Ārādhana* を中心に—」(『日本仏教学会年報 75号』日本佛教学会 . pp. 69-80)

[2014] 「*Bhagavati Ārādhana* が記す *daśa kāmāvasthāḥ*」(『待兼山論叢. 哲学篇. 48号』大阪大学文学部 . pp. 65-80).

金倉圓照

[1944] 『印度精神文化の研究—特にジャイナを中心として』盈科舎.

小林泰久

[2011] 「ジャイナ教の五知説—*matī* と *śruta* —」(『筑紫女学園大学・短期大学部人間文化研究所年報 22号』筑紫女学園大学・短期大学部人間文化研究所. pp. 17-29)

佐久間瑠理子

[2011] 『インド密教の観自在研究』山喜房佛書林.

定方晟

[1985] 『インド宇宙誌』春秋社.

鈴木重信

[1930] 『耆那教聖典』世界聖典全集刊行會 (改造社版).

立川武蔵

[2004] 『曼荼羅の神々 仏教のイコノロジー』(新装第一版発行) ありな書房.

谷川泰教

[1988] 「原始ジャイナ教」(『岩波講座東洋思想第5巻 インド思想 1』岩波書店. pp. 62-86).

引田弘道

[1997] 『ヒンドゥータントリズムの研究』山喜房佛書林.

藤永伸

[2006] 『ジャイナ教の一切知者論』平楽寺書店.

松濤誠廉

[1967a] 「ジャイナ教の禪定について—裸形派の禪定を中心として—」(『佛教における信と行：松濤教授論文集』平楽寺 . pp. 213-252).

[1967b] 「*Samudghāta* の内容について—仏教との関連において—」(『佛教における信と行：松濤教授論文集』平楽寺. pp. 253-262).

キーワード

ジャイナ教, 空衣派, タントリズム, 瞑想, 『ジュニャーナールナヴァ』